

国立国語研究所学術情報リポジトリ

ダケの位置と限定のあり方： 名詞句ダケ文とダケダ文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): NP-dake V, S-dake-da, meaning of dake as "only" or "limited to", the position of dake, grouping 作成者: 安部, 朋世, ABE, Tomoyo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002018

ダケの位置と限定のあり方 —名詞句ダケ文とダケダ文—

安部 朋世
(筑波大学大学院)

キーワード

名詞句ダケ文, ダケダ文, 限定, ダケの位置, 集合

要旨

本稿は、名詞句に接続するダケと文末に位置するダケの限定様式の違いを明らかにする。

これまで「同義」とみなされてきた、ダケが名詞句に接続する名詞句ダケ文と文末に位置するダケダ文には、前者が不自然に感じられる文脈が存在する。これは、限定される要素が同じ名詞句ダケ文とダケダ文であっても、当該要素を含む〈前提集合〉のあり方が異なることに由来するものである。ダケダ文では不足感を伴うニュアンスが感じられること等が指摘できることから、それぞれの前提集合のあり方は、次のようにまとめられる。

- ① 名詞句ダケ文における前提集合は、発話者の主観的尺度からの色付けがなく、単に〈同列関係〉にある事象から構成される集合である。
- ② ダケダ文における前提集合は、〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の主観的色付けがなされた集合である。

1. はじめに

ダケは「限定」を表すとされ、その限定のあり方について様々な研究がなされてきた。とくに、ダケの位置の違いと文の表す意味との関係については、多くの現象が指摘され論じられている。例えば、ダケデとデダケのような、ダケと助詞との承接順序と意味の違いについては、森田(1972)以来多くの研究があり、複数の節を含む文におけるダケの位置と意味との関係から、ダケのスコープと節との関わりについて論じたものとしては、Sano (1985)等が挙げられる。これら先行研究に共通するのは、ダケの位置の違いが文の意味に影響を及ぼすことに注目する点である。

一方、同一の節内においては、ダケの位置が異なっても「同義」に解釈できるという現象も指摘されている。單文においてダケが名詞句に接続した場合でも、同じ文の文末にダケを移動させた場合と「同じ」解釈が可能であるという指摘である。例えば、沼田(1986)は、名詞句にダケを接続させた文と文末にダケを移動させた文とが「同義」になる例として、次の(1)を挙げる。(1)では、ダケが名詞句に接続する文(以下「名詞句ダケ文」) bと、文末に位置する文(以下「ダケダ文」) aは「同義」に解釈でき、両者のダケは、「仕事をする」との対比で「代金をもらう」を限定する、あるいは「代金をもらう」をスコープにとると説明される¹。

(1) a [代金をもらう] ダケで、仕事をしない。 (沼田(1986) p.147 例文(1) a, b)

b [代金ダケもらって], 仕事をしない。 ([] はダケのスコープ)

この指摘に基づくと、以下のダケダ文と名詞句ダケ文の対も、限定される要素が同じであり、「同義」に解釈される例ということになる。

(2) a 私は [ビールを飲んだ] ダケだ。料理には手をつけなかった。

(ダケダ文：異型事象限定)

b 私は [ビールダケ飲んだ]。料理には手をつけなかった。

(名詞句ダケ文：異型事象限定)

(3) a 私は [ビールを飲んだ] ダケだ。ワインは飲まなかった。

(ダケダ文：同型事象限定)

b 私は [ビールダケ飲んだ]。ワインは飲まなかった。

(名詞句ダケ文：同型事象限定)

(2)においてダケが限定する要素は、a, bともに「ビールを飲んだ」であり、「料理に手をつけた」のような、異型の要素（ダケが接続する名詞句の部分だけでなく述語部分も異なる）と対比されるものである。一方、(3)でダケが限定する要素は、やはりa, bともに「ビールを飲んだ」であるが、「ワインを飲んだ」のような、名詞句「～を」以外の部分が共通する同型の要素と対比されている。本稿では、(2)のように異型の事象の対比に基づく限定を〈異型事象限定〉、(3)のように同型（名詞句ダケ文のダケが接続する名詞句以外の部分が同一）の事象の対比に基づく限定を〈同型事象限定〉と呼ぶことにする²。

沼田(1986)やそれに修正を加えた沼田・徐(1995)では、対比関係を構成する要素((2)(3)の下線部)とダケの位置との関係から、スコープあるいはフォーカスの種類を整理する。つまり、沼田(1986)や沼田・徐(1995)の枠組みでは、同型事象限定と異型事象限定の違いが重要であり、名詞句ダケ文とダケダ文の意味の違いはそれほど重要ではないということになる。

しかし、同型事象限定であれ、異型事象限定であれ、名詞句ダケ文とダケダ文は決して同義ではない。例えば、(2)(3)をそれぞれ次のような文脈にかえると、ダケダ文は自然であるが、名詞句ダケ文は不自然に感じられる。

(4) 異型事象限定(2)の文脈をかえた例

a 私は [ビールを飲んだ] ダケだ。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

b ?私は [ビールダケ飲んだ]。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

(5) 同型事象限定(3)の文脈をかえた例

a 私は [ビールを飲んだ] ダケだ。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

b ?私は [ビールダケ飲んだ]。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

これらの例は、「限定される要素は何か」ということと、「ダケを含む文がどのような意味的特徴をもつか」ということが、別のレベルの問題であることを示唆している。

ダケが「限定」を表すとは、〈ある前提のもとに形成される集合（以下「前提集合」）の要素の中から、当該の要素を選び出し、同時に、他の要素を非該当要素として否定する〉ことであると言い換えられる。つまり、ある要素が限定される際には、〈前提集合の設定〉と〈前提集合からの当該要素の選択〉の二つのことが行われているのである。本稿では、限定される要素が同じ名詞句ダケ文とダケダ文の意味の違いが、〈前提集合の設定〉のあり方の違いに由来することを主張する。

なお、ダケダ文には、(2) a (3) a のようなタイプの他に、次のようなものがある³。

- | | |
|----------------------------------|----------|
| (6) スタメンが2軍選手ダケだ。 | (名詞述語文) |
| (7) この料理は辛いダケだ。 | (形容詞述語文) |
| (8) 手元にあるのは1000円ダケだ。 | (分裂文) |
| (9) 収入が減ったら節約するダケだ。 | (慣用句用法) |
| (10) 料理も飲み物も準備できた。あとは、お客様が来るダケだ。 | (直前状態用法) |

本稿の最後では、これらのタイプも(2) a (3) a のタイプのダケダ文と基本的には同じ限定様式であることをみる。

2. 同型事象限定における名詞句ダケ文とダケダ文の比較

本節では、同型事象限定の場合の名詞句ダケ文とダケダ文を比較し、それぞれのダケが限定する際の前提集合について考察する。2.1.で、名詞句ダケ文とダケダ文の特徴を記述し、それをもとに、2.2.で前提集合のあり方を述べる。

2.1. それぞれの文の特徴

まず、ダケダ文の特徴を挙げる。

同型事象限定において、ダケダ文は自然であるのに名詞句ダケ文の方が不自然になる文脈は、前節で挙げた(5)の他に、次の(12)(14)のような例が存在する。

- (11) X：前半戦7日間を終わって、貴花田は誰に勝ちましたか？

Y : a [千代乃富士に勝った] ダケだ。他には勝っていない。
b [千代乃富士にダケ勝った]。他には勝っていない。

- (12) a 前半7日間で、貴花田は〔千代乃富士に勝った〕ダケだ。勝ち越しが危ぶまれるよ。

b ?前半7日間で、貴花田は〔千代乃富士にダケ勝った〕。勝ち越しが危ぶまれるよ。

- (13) X：新人賞を取った小説には何をどのように書いたの？

Y : a [実体験を書いた] ダケだ。他のことは書いていない。
b [実体験ダケ書いた]。他のことは書いていない。

- (14) X：新人文学賞受賞、おめでとう。おもしろいと評判だね。

Y : a [実体験を書いた] ダケだ。たいしたことは書いていないのに照れてしまうよ。
b ?[実体験ダケ書いた]。たいしたことは書いていないのに照れてしまうよ。

このような、対になる名詞句ダケ文が不自然になるダケダ文(5) a (12) a (14) Ya をみると、ダ

ケダ文に後続する文脈が、いずれも発話者の主張や意見であり、ダケダ文が、その主張・意見の背景となる事象であることに気付く。例えば、(5)は「急に帰るのは残念である」という発話者の感情が述べられているが、その感情の背景として、「ビールを飲んだのみである」ことが挙げられており、(12)は「勝ち越しが危ぶまれる」という発話者の主張の背景として、「千代乃富士に勝ったのみである」ことが述べられる文である。(14)についても同様に、後続文脈が発話者の主張を表し、ダケダ文がその背景となる事象を表している。

また、発話者の主張の背景となる事象、つまり、ダケダ文によって表される事象が、何らかの点で「不足している」と感じられる点も特徴的である。例えば、(5)は、「コンパでの満足感」を満たすものとして、「ビールを飲んだ」のみでは不十分であるというニュアンスが感じられ、(12)も、「勝ち越しの確信」には「千代乃富士に勝った」のみでは不十分であると感じられる。ダケダ文が、これらのように、発話者の「不満足感」といったマイナスの感情を伴う文脈と馴染みやすいことも、ダケダ文によって表される事象が、何らかの点で「不足している」と感じられ、それが「不満足感」と結びつきやすいためだと考えられる。

一方、(14)では、必ずしも発話者が「不満足感」を抱いているわけではない。世間の評価に対し、「実体験を書いたのみである」と謙遜している例であり、マイナスの感情は伴っていない。しかし、自分のやったことに対し、「評価されるような多くのことはやっていない。非常に些細なことをやった」というニュアンス、つまり、「不十分である」と感じられるることは、先に挙げた例と同じである。

以上、ダケダ文の特徴として、次の2点が挙げられる。

- (15) ① 発話者の主張・意見の背景となる事象として解釈できること。
- ② 「不十分である」といったニュアンスが感じられること。

一方、名詞句ダケ文は、ダケダ文が自然である(5)(12)(14)のような文脈、すなわち(15)①②の特徴をもつ文脈では不自然に感じられた。このことから、名詞句ダケ文は、〈発話者の主張の背景となる事象〉という解釈や、〈不十分〉というニュアンスは感じられない文だということになる。

2.2. 前提集合のあり方

先に挙げた名詞句ダケ文、ダケダ文の意味的特徴をもとに、前提集合のあり方について考察する。

まず、ダケダ文における前提集合のあり方を考える。

(5)のダケダ文「ビールを飲んだダケだ」は、「急に帰るのは残念だ」という後続文脈があり、「コンパで満足感を得るには、“ビールを飲んだ”という事象のみでは不十分だ」というニュアンスが感じられる。この不足感が何に基づくものかを考えると、発話者が想定する「満足感」を満たすものとして挙げられるのが、「ビールを飲んだ」という事象のみであることから生ずると考えることができる。

また、(12)のダケダ文「千代乃富士に勝ったダケだ」は、「勝ち越しが危ぶまれる」という文脈が続く例であり、「勝ち越しを確信するには“千代乃富士に勝った”のみでは不十分だ」という

不足感が感じられる文である。これは、「勝ち越しの確信」を満たす事象としては、対戦数の半数以上に勝たなければならず、負けてばかりではいけないはずなのに、その予想に反して、実際に行われた事象が「千代乃富士に勝った」という事象のみに限定されているため、不足感が感じられるのだと考えられる。

(14) のダケダ文の例は、発話者の謙遜とされる文であった。このダケダ文「実体験を書いたダケだ」は、「おもしろいと評判だ」という文脈をうけており、「たいしたことは書いていない」という謙遜が感じられる。これは、「文学作品で新人賞をとる」という条件を満たすものとしては、例えば「時代にあった話題を書く」等の複数の事象が想定され、より工夫した内容を書く方が賞賛に値すると予想されるが、実際に行なったことは「実体験を書く」ことのみであると発話者が述べていることから、「一つのことでは賞賛に値しないのに、賞賛されるのは恥ずかしい」という謙遜が感じられるのだと考えられる。

これらの例は、ダケダ文によって限定される事象が、〈発話者が想定するある前提を満たす〉ものとして位置付けられている。(5) では発話者が想定する「満足感」を満たす事象であり、(12) では「勝ち越しの確信」を満たす事象であり、(14) では「新人賞を取り評判になるに値する努力」を満たす事象として位置付けられている。そして、その前提は、「満足/確信/評判」といった、〈発話者の主観的尺度に基づく前提〉だと考えられる。この、〈発話者の主観的尺度に基づく前提〉を満たすものとして想定される事象の集合が、すなわち、ダケダ文において想定される集合なのである。

これに対し、名詞句ダケ文における前提集合は、〈発話者の主観的尺度〉という色付けがなく、〈互いに同列の関係にある同型事象〉からなる集合だと考えられる。

例えば、(12) は、15日間の取組の7日目後で、貴花田の勝ち越しを問題にしている文脈であり、ダケダ文「貴花田は千代乃富士に勝ったダケだ」は自然な文に感じられるが、名詞句ダケ文「貴花田は千代乃富士にダケ勝った」は不自然に感じられる。この名詞句ダケ文の不自然さは、名詞句ダケ文が、単に「終了した7日間の取組の中で、貴花田が勝った取組」という過去の事実を述べているだけのように感じられ、「貴花田の勝ち越し予想」という文脈とは馴染まないからだと考えられる。この (12) を、次のように、場所終了後という文脈にかえても、名詞句ダケ文は依然として不自然である。

(16) a 今場所、貴花田は千代乃富士に勝ったダケだ。大闘戦は一からやり直しだ。

b ?今場所、貴花田は千代乃富士にダケ勝った。大闘戦は一からやり直しだ。

(16) の名詞句ダケ文 b は、場所が終わって「1勝14敗」であったことを表す文である。この事実を一般常識に照らし合わせると、来場所いくら成績がよくても大闘戦になれないことは明らかであり、「大闘戦取りはやり直し」という後続文脈に対する適切度が高くなることが予想されるが、実際には、やはり適切度が下がる。つまり、この名詞句ダケ文は、発話時点が (12) とは異なるものの、「発話時までに終わった取組」の中で「貴花田が勝った」という事実を述べているだけという点にはかわりがないのである。単に過去の同型の事象の中で「実際に起こった事象」を限定する文であることから、「予想」等の内容が後続文脈に現れると、不自然に感じられるのだと考えら

れる。

(12) (16) の名詞句ダケ文が、発話者の主観的尺度という色付けがなく、単に同型の事象の中から実際に起こった当該事象を限定する文であることは、例えば、(11) のように、単に「今までに誰に勝ったか」を問う文脈に対してならば、名詞句ダケ文「千代乃富士にダケ勝った」の適切度が上がり、答えとして自然に感じられることからも、支持されると考えられる。

以上の考察から、同型事象限定における名詞句ダケ文とダケダ文のそれぞれの前提集合のあり方は、次のようにまとめられる。

- (17) ① 名詞句ダケ文の前提集合：発話者の主観的尺度という色付けがなく、〈互いに同列の関係にある同型事象〉からなる集合。
- ② ダケダ文の前提集合：〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の主観的色付けがなされた集合。

3. 異型事象限定における名詞句ダケ文とダケダ文の比較

本節では、3.1.で、異型事象限定における名詞句ダケ文とダケダ文それぞれの前提集合のあり方が、(17) に指摘した同型事象限定におけるそれぞれの前提集合と基本的に同じことをみる。また、3.2.で、名詞句ダケ文が異型事象を限定する場合に制限がみられることに注目し、如何なる場合に異型事象限定に解釈されるかを考察する。

3.1. 前提集合のあり方

次に、異型事象限定の例を挙げる。

- (18) X : お正月の準備は何をしましたか？

Y : a [年賀状を書いた] ダケだ。他には何もしていない。

b [年賀状ダケ書いた]。他には何もしていない。

- (19) a 私は [年賀状を書いた] ダケだ。終わっていないことが多すぎて、とてもお正月を迎える状況ではないよ。

b ?私は [年賀状ダケ書いた]。終わっていないことが多すぎて、とてもお正月を迎える状況ではないよ。

- (20) X : 今回の災害には何をしたの？

Y : a [お金を送った] ダケだ。他には何もしていない。

b [お金ダケ送った]。他には何もしていない。

- (21) X : 今回の災害には巨額の寄付をしたと評判だね。

Y : a [お金を送った] ダケだ。本来ならば現地に駆けつけるべきなのだろうが。

b ?[お金ダケ送った]。本来ならば現地に駆けつけるべきなのだろうが。

これらの例も、ダケダ文については(15)に指摘した特徴が観察される。例えば(19)のダケダ文「年賀状を書いたダケだ」は、「お正月なんて迎えられない」という主張の背景として挙げられており、「お正月を迎えるには不十分だ」という不足感が感じられる文である。これは、「お正

月を迎えるのに必要な準備」を満たす事象としては、「大掃除をする」や「おせちをつくる」等、多くの事象が想定されるが、その予想に反して、実際に行われた事象が「年賀状を書いた」という事象のみに限定されているため、不足感が感じられるのだと考えられる。

発話者の謙遜ととれる(21)のダケダ文「お金を送ったダケだ」は、「災害時に巨額の寄付をするとは感心だ」という文脈をうけており、「お金を送ったのみではたいしたことではない」という謙遜が感じられる。これは、「災害時に助けとなること」を満たすものとしては、「現地で活動する」等の複数の事象が想定され、より多くのことを行う方が賞賛に値すると予想されるが、実際に行ったことは「お金を送った」のみであると発話者が述べていることから、「一つのことでは賞賛に値しないのに賞賛されるのは恥ずかしい」という謙遜が感じられるのだと考えられる。

これら異型事象限定のダケダ文も、〈ある前提を満たす〉ものとして位置付けられている。(19)では「お正月を迎えるのに必要な準備」を満たす事象であり、(21)では「災害時に助けとなること」を満たす事象として位置付けられている。そして、その前提是、「必要な準備/助け」といった、〈発話者の主観的尺度に基づく前提〉だと考えられる。異型事象限定においても、ダケダ文の前提集合は〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された集合だと考えられる。

一方、名詞句ダケ文は、(19)(21)のような文脈では不自然になることからわかるように、前提集合に発話者の主観的尺度という色付けは特にない。また、(18)(20)でも、名詞句ダケ文を用いた場合には、「お正月の準備/災害救助」という状況下で客観的に想定される事象からなる集合から、実際に起こった当該要素を限定するだけの文になる。このことから、異型事象限定の場合も、先の同型事象限定の場合と同じく、前提集合は、発話者の主観的尺度による序列付けのない、単なる〈何らかの共通性を有する同列関係〉にある事象の集合であると考えられる。

ただし、名詞句ダケ文は如何なる場合にも異型事象限定の解釈ができるというわけではない。以下では、名詞句ダケ文において異型事象対比の解釈が可能になる条件について考える。このことは、異型事象限定の名詞句ダケ文における〈何らかの共通性を有する同列関係〉の具体的な内容について考えることでもある。

3.2. 名詞句ダケ文において異型事象対比の解釈が可能な条件

名詞句ダケ文は「如何なる場合にも異型事象限定の解釈が可能である」というわけではない。例えば、次の例をみられたい。(22)は、丹羽(1992)で、「夏バテ対策としていろいろなことが考えられる中で何をしたか」という文脈において、a, bともに可能となる文(本稿でいう異型事象限定)とされる。

(22) a 私は鰻を食べたダケだ。

b 私は鰻ダケ食べた。

(丹羽(1992) p.98 例文⑪b, c)

しかし、(22)bの名詞句ダケ文を異型事象の限定と解釈するのは非常に困難に思われる。実際に、(23)のように、異型事象の文脈を問い合わせとする文の答えとしてみると、名詞句ダケ文のYbは、ダケダ文Yaと同じ異型事象限定の解釈ができず、不自然に感じられる。

(23) X : 今年の夏は暑かったけれど、夏バテ対策に何をしたの？

Y : a 私は鰻を食べたダケだ。

b ?私は鰻ダケ食べた。

では、如何なる場合に異型事象限定の解釈が可能となるのであろうか。

結論を先に述べると、名詞句ダケ文において異型事象限定の解釈が可能となるのは、

- (24) ① ダケの接続する名詞句と述語との意味的な結びつきが強い場合。
② 〈一定の手順や完結した一連の事象〉という共通性を有する前提集合が想定される場合。

の二つの場合だと考えられる。

(24) ①は、益岡(1991)の指摘である。益岡(1991)は、「取り立て助詞」全般について考察するものであるが、名詞句ダケが異型事象を限定する現象と同様の現象が「取り立て助詞」全般にみられることに注目し、その特徴を「述語と名詞句との意味的な結びつきが強い場合」であると指摘して、具体的に 1) 意味役割が原則として「着点」や「対象」の場合 2) その中でも「お茶を飲む/テレビを見る」等、結合の慣用性の高い場合 3) 村木(1980, 1985)のいう「機能動詞結合」の場合、を挙げる⁴。

この指摘をダケについて検討すると、まず、移動の起点を表すカラ格(例文(25))や移動経路のヲ格(例文(26))のように、「着点」や「対象」以外の要素(すなわち動詞との結びつきが比較的弱い要素)にダケがついた場合は、異型事象限定の解釈が困難になる(異型事象限定を要求する文脈で不自然になる)。

(25) X : 成人病の予防のために何をしているの？

Y : ?一駅前からダケ歩いているよ。

(26) X : 昨日の晩、何をしていたんだ。

Y : ?彼女の家の前ダケ通った。

また、「慣用性」「機能動詞結合」に関しても同様のことが観察される。これらの特徴は、〈ダケが接続する名詞句以外に述語と結びつく可能性があるものを想定しにくい場合〉、すなわち〈ダケが接続する名詞句と述語との結びつきが特立的である場合〉と言い換えることができる。次の(27)a, bを比較されたい。

(27) a お茶ダケ飲んだ。

b 飲み物ダケ飲んだ。

aのようにダケを「お茶を」に接続させた場合、「お茶以外のものは飲まなかった」という同型事象の限定を想定することは、「他のことはしなかった」という異型事象の限定を想定することと同じくらい容易であると思われる。一方、bの「飲み物ダケ飲んだ」では、「他のことはしなかった」という異型事象の限定を想定する方は容易であるが、「他のものは飲まなかった」という意味を想定することはaほど容易ではない。

(27) のa, bはともにダケの接続する名詞句と述語の結びつきが同程度に高いと考えられる。「お茶」は「飲む」ものであるし、「飲み物」も「飲む」ものである。しかし、「お茶」はそれ以外に「飲むもの」として「お酒/ジュース」等が容易に想定できるのに対し、「飲み物」は「お茶/お酒」

等を含む、「飲む」と結びつく対象の総称であり、「飲む」に対して「飲み物」と対等に結びつく対象の想定は非常に困難である。つまり、bのように名詞句と述語との結びつきが〈特立的〉な場合に、異型事象限定の解釈が可能となるということができる。「慣用性が高い」方が異型事象を想定しやすいのは、結びつきが強い方が他の結びつきを相対的に想定しにくくなるためであり、「機能動詞結合の場合」という指摘も、当該名詞句以外に述語と対等に結びつくものがないという点で、〈特立的〉であるといえよう。

しかし、「結びつきの強さ」だけでは、異型事象限定の解釈を許す(2) b「ビールダケ飲んだ」と異型事象限定の解釈が困難である(23) Yb「鰻ダケ食べた」の違いが説明できない。この違いは、(24) ②に挙げた、〈一定の手順や完結した一連の事象〉という共通性を有する前提集合が想定されるか否かの違いだと考えられる。

「ビールダケ飲んだ」という文は、「飲んだ」と結びつくものとしては、「ビール」以外にも「ワイン/ジュース」等多数考えられるにもかかわらず、(2) にみられるように、異型事象を限定する文としての解釈が比較的容易である。

これは、「ビールを飲む」事象が想定される状況を考えた際、「まずビールで乾杯し、食事をし」という宴会等の状況が、一般によくみられる状況として存在することから、「食べる」等の対立する異型事象が把握しやすいためだと考えられる。この「宴会」等の状況は、「乾杯/食事/…/閉会」のような一定の手順、あるいは「“宴会”を完結させるような、あるべき一連の事象」が存在し、その中の一つの事象として「ビールを飲む」ことを位置付けることが可能である。

一方、「鰻ダケ食べた」も、「食べた」という述語自体が「鰻」以外に「焼き肉」等多数のものと結びつきやすく、特立的でない点は、先の「ビールダケ飲んだ」と同様である。しかし、「鰻を食べる」という事象には、例えば、「夏バテ対策は、鰻を食べて、…、睡眠をとれば、万全である」などの、当該事象を〈ある状況を完結させる一事象〉として位置付けるような一般常識・共通認識がない。よって、「睡眠をとることはしない」といった異型事象との対立よりも、「他のものは食べない」という同型事象との対立を想定しやすくなり、(23) のように、異型事象限定を要求する文脈では不自然に感じられるのだと考えられる。

さて、(24) ①は、同型事象が想定しにくいために異型事象対比の解釈がしやすくなるケースである。また、②は、当該場面で通常想定される一定の手順あるいは一連の事象に依存して異型事象対比が成立するケースである。①と②はそれぞれ別の要因であるから、①と②の両方を満たすケースもある。例えば、「飲み物ダケ飲んだ。料理は口にしなかった。」のような例は、「飲み物」と「飲む」の意味的な結びつきが強いという点でも、また、「飲み物を飲む」ことが「飲み物を飲む/料理を口にする…」のような「食事」の場面で想定される一連の動作に含まれるという点でも、異型事象限定の解釈がしやすくなっているといえる。

このように、異型事象限定の名詞句ダケ文における前提集合の想定の仕方には二つのタイプがある。しかし、いずれの場合も、前提集合が〈発話者の主観的尺度に基づく序列付けのない同列の関係にある要素からなる集合〉であることにはかわりがない。その意味で、名詞句ダケ文とダケダ文における前提集合の性質そのものは、同型事象限定の場合も異型事象限定の場合も同じだ

と考えてよい。

4. 名詞句ダケ文とダケダ文それぞれの前提集合の違い

前節最後で述べたように、異型事象限定にせよ同型事象限定にせよ、名詞句ダケ文における前提集合が、発話者の主観的尺度という色付けがなく、単に〈同列の関係〉にある事象から構成される集合にはかわりがない。よって、それぞれの前提集合のあり方は次のようにまとめられる。

- (28) ① 名詞句ダケ文の前提集合：発話者の主観的尺度という色付けがなく、単に〈同列の関係〉にある事象から構成される集合。
- ② ダケダ文の前提集合：〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の主観的色付けがなされた集合。

以下、この違いについて、4.1.で、とくにダケダ文の方に〈発話者の主観的尺度〉という色付けがなされた集合が想定されることを支持すると考えられる現象を指摘する。また、4.2.では、先行研究で「同義」とされたような、名詞句ダケ文もダケダ文もともに自然な文と解釈される例について、なぜ「同義」と解釈されるのかを考える。

4.1. ダケダ文と〈発話者の主観的尺度〉

次の例は、ダケダ文における前提集合が、発話者の主観的な尺度に基づいて設定された集合であることを支持するものと考えられる。CMにててくる次のダケダ文の例をみられたい。

- (29) (ある店で40代の女性3人が次々と洋服を品定めしていく。店員が近寄っていくと…)

女性3人：「見てるダケー」

これは、とくに店員が質問を発するわけではなかったと思われるが、女性3人は、店員が近寄って品物を買わせようとする気配を感じ、「見てるダケ」とダケダ文を使用する。これも、発話者である女性3人が、ダケダ文を使用することによって、「我々がこの店に入って行うこと」という前提に基づく集合を店員側に類推させ、「買う」という行為の位置付けを理解させることによって、直接口にはしないものの、「買う意志はない」ことを店員に伝える効果があると考えられる。ダケダ文が発話者の設定した前提をもとにすることを利用した例だといえよう。

ダケダ文の前提集合が、発話者の主観的尺度に基づいて発話者自身が設定した集合であることは、次の例からも窺える。

- (30) X：年賀状、何枚書いた？

Y：書くどころか年賀状を買って来たダケだ。

(30) では、年賀状を書いたか否かが問われている文脈であるが、Yの内容から年賀状を1枚も書いていないことが了解される。しかし、ダケダ文をみると、「年賀状を買って来た」という事象が限定されており、問題とされているのは、「書く/書かない」ではなく、「買って来た」という「書く」こと以前の事象である。これは、「年賀状を書いたか」という質問を受けた発話者が、発話者自身で前提を構築し直して、「年賀状にかかわる事象」という集合のもとに、「書く」以前の事象の「年賀状を買って来た」を限定しているのであり、結果的に、「1枚も書いていない」ことを強

調しているものと考えられる。

さらに、ダケダ文と名詞句ダケ文が対をなす場合、名詞句ダケ文が不自然に感じられる文脈であっても、その名詞句ダケ文のダケをシカと置き換えると、ダケダ文と同様、自然な文として解釈されるようになることが指摘できる⁵。

(31) 私はビールシカ飲んでいない。これから美味しいワインや珍しい日本酒が飲めるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

(32) 前半7日間で、貴花田は千代乃富士にシカ勝っていない。勝ち越しが危ぶまれるよ。

(33) X：新人文学賞受賞、おめでとう。おもしろいと評判だね。

Y：実体験シカ書いていない。たいしたことは書いていないのに照れてしまうよ。

(34) 私はビールシカ飲んでいない。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるところなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。

(35) 私は年賀状シカ書いていない。終わっていないことが多すぎて、とてもお正月を迎える状況ではないよ。

(36) X：今回の災害には巨額の寄付をしたと評判だね。

Y：お金シカ送ってない。本来ならば現地に駆けつけるべきなのだろうが。

(31)から(36)の例は、名詞句ダケ文が不自然に感じられる例(5)(12)(14)(4)(19)(21)の名詞句ダケ文のダケをシカに置き換えた例であるが、いずれも自然な文として解釈できる。この〈シカとの互換性〉という特徴も、ダケダ文における前提集合が、発話者の主観的尺度に基づいた集合であることの妥当性を示すものと考えられる。

シカはダケと同様「限定」を表すとされることから、先行研究でもダケとシカの違いについて多くの議論がみられる。例えば、寺村(1991)や沼田(1993)では、ダケは限定される要素が主・視点が置かれるのに対し、シカは限定される以外の要素が主・視点が置かれる、といった違いが指摘されるが、より分析的には山中(1993)の以下のような特徴の違いとして捉えられる。

山中(1993)は、主として本稿の名詞句ダケ文を中心とするダケ文と「しか～ない」の形のシカ文について、シカが1)条件文の前件に使用されると十分条件を表せない2)要求・懇願表現に使用しにくい3)概数・不定量に接続できる4)否定文での使用に制限がある、という4点の相違点を挙げる。そして、シカの使用目的は、「話し手の信念世界においてある成立した事柄を量化して捕え、成立以前に話し手が期待・予測していた値に満たなかったことを表示する」(p.86)ものだとする。つまり、シカ文は、期待・予測していた値を満たすか否かが問題とされる文だということになる。一方、本稿は、ダケダ文のダケが〈発話者が主観的尺度に基づいて設定する前提を満たす〉事象として当該事象を限定すると考える。ダケダ文がシカ文と互換性を有することは、シカ文もダケダ文も〈発話者の設定する基準を満たすか否か〉を問題とする点が共通すると考えれば、説明が可能となる。

4.2. 名詞句ダケ文とダケダ文との近似と相違

では、対になる名詞句ダケ文とダケダ文が「同義」に解釈されるのは如何なる場合であろうか。

ダケダ文で想定される集合の前提は、発話者が自由に設定する前提であり、その尺度は、一般には通用し難いような、発話者の主觀性の強いものから、一般にも認められる主觀的色合いの弱いものまで、幅があると考えられる。名詞句ダケ文とダケダ文の対が「同義」に解釈される場合は、ダケダ文で想定される集合が、客觀的な尺度と近似する尺度に基づいて発話者に設定された場合であり、名詞句ダケ文における集合と近似することから、ほぼ「同義」に解釈されるのだと考えられる⁶。

しかし、想定される集合が似ていても、名詞句ダケ文とダケダ文における限定のあり方はあくまでも異なるものである。実際、次のような「同義」とされる例についても意味の違いが感じられる。

(37) X : 夏目漱石の本は何を読んだ?

Y : a 『坊ちゃん』を読んだダケだ。

b 『坊ちゃん』ダケ読んだ。

(37) ではダケダ文 Ya も名詞句ダケ文 Yb もともに不自然には感じられないが、ダケダ文が問い合わせの答えである場合は、「1冊のみで恥ずかしい」等の発話者のニュアンスを感じられる。ダケダ文は〈発話者の主觀的尺度によって設定された集合〉に基づく限定であり、名詞句ダケ文の限定のあり方とは異なるのである。

5. その他のダケダ文

本節では、名詞述語文や慣用句用法等のダケダ文においても、基本的にはこれまでみてきた典型的なダケダ文と同様の限定様式であることをみる。

5.1. 名詞述語文・形容詞述語文・分裂文

まず、名詞述語文・形容詞述語文や分裂文について考察する。

次の例は、「AがBだ」全体が表す事象をダケが限定する例であるが、これまでみてきたダケダ文と同様、何らかの不足感が感じられる。

(38) 日本の敗北が決まったわけではない。三浦選手が出場停止であるダケだ。他の選手は調子がいいし、相手チームはけが人も多い。

(38)は「日本チームの敗北を確信する材料」を前提として、「三浦選手が出場停止だ」という事象を限定していると考えられる。この前提是、発話者によって想定されたものであり、「日本チームの不利」だと判断するには不十分であるという解釈が可能である。やはり、これまでみてきたダケダ文と同じ限定のあり方だということができる。

また、次の例も、「AがBだ」全体が表す事象をダケが限定する例である。

(39) X : 君の会社、休みが多くて羨ましいね。

Y : 何勘違いしてるの？ 日曜日が休みなダケだ。しかも残業も多くて大変だよ。

(39) のダケダ文にも不足感が感じられるが、これは、「会社に対する満足度」を満たす要素のうち、実際にみたされているのが「日曜日が休みだ」のみであることから感じられる不足感だと考えられる。

考えられる。

次の例は、「AがBだ」のBをダケが限定する例である。

(40) スタメンが2軍選手ダケだ。試合をなめている。

(41) 参加者が若者ダケだ。主張は認められない。

これらの文も、「試合に対する真剣さ」や「主張を認可するための条件」といった前提を満たすものとして不十分であると解釈できる。

次は、「AはBだ」のBをダケが限定する例である。

(42) この料理は辛いダケだ。香辛料特有の旨味が感じられない。

(43) 城選手はJリーグの一選手であるダケだ。平成のヒーローでも日本を背負っているわけでもないのだから、手のひらを返したような批判はかわいそうだ。

これらも、何らかの不足感が感じられ、ダケの限定のあり方も、これまでの例と同様に考えられる。例えば、(42)は、「この料理」の評価が低いことの根拠として「この料理は辛いダケだ」と述べる文であり、評価に値するためには「辛い」のみでは不十分であるという不足感が感じられる。

さらに、分裂文にも次のように不足感が感じられる例が存在する。

(44) 手元にあるのは1000円ダケだ。全部は買えない。

しかし、分裂文の場合、感じられる不足感の度合いに差があるようである。例えば、先の(37)Xのように「夏目漱石の本は何を読んだか」という問い合わせに対して、「読んだのは『坊ちゃん』ダケだ」という分裂文での返答と、(37)Yaの「『坊ちゃん』を読んだダケだ」というダケダ文での返答を比べると、前者の分裂文は、単に「読んだ本」を述べただけで、不足感のような特別のニュアンスは感じられないように思われる。(44)のように、数量詞「1000円」によって「数値」という尺度が明示的に導入される場合は、ある基準に達するか否かという観点から限定される要素を捉えることが容易になるため、不足感を感じやすくなるのであろう。

5.2. 「条件節を伴う慣用句用法」と「直前状態用法」

「～なら/たら/れば…ダケだ」の形の「慣用句用法」や「直前状態用法」のダケダ文は、典型的なダケダ文が有する「不足感」とは異なるニュアンスを伴う。しかし、〈発話者の主観的尺度〉が前提集合や限定に大きく影響していることから、これらもこれまでみてきたダケダ文と同様の限定様式に分類されると考えられる。

まず、「慣用句用法」の場合である。

(45) 収入が減ったら節約するダケだ。借金をしなくても、十分暮らしていけるよ。

(46) 成績が悪かったら辞めもらうだけだ。他に契約内容の選択肢はない。

(45)は、生活していく上で「収入が減る」という条件があるならば、他のことをしなくても「節約する」ことで、「生活する」という前提を満たすことが可能である、ということを述べる文であり、また、(46)は、契約を結ぶ上で「成績が悪い」という条件があるならば、「辞めもらう」以外に「契約を結ぶ」という前提を満たす選択肢がない、ということを述べる文である。

これら「慣用句用法」は、当該事象が発話者にとって「前提を満たす唯一の選択肢」として選択されている点が共通している。また、「慣用句用法」においては、選択された当該事象が、しばしば聞き手側に予想外の事象だと感じさせる場合がある。これらはいずれも、発話者がそのような当該事象を一要素とする集合として前提集合を位置付けている、すなわち、前提集合の設定に際し、〈発話者の主観的尺度〉に基づいた設定がなされていることを示していると考えられる。このように考えると、「慣用句用法」もこれまでみてきたダケダ文の限定様式に沿うものとして位置付けられよう。

次に、「直前状態用法」の場合である。

(47) 下ごしらえもできだし、あとはお肉を焼くダケだ。

(48) 料理もできだし、飲み物も冷えている。あとは、お客様が来るダケだ。

この用法は、「あとは/もう」といった副詞類が馴染むことからもわかるように、ある事柄について、それが完了するために残された事象は、ダケによって限定された事象である、ということを述べる文である。例えば、(47)ならば、「料理づくり」に関して、その完了が「お肉を焼く」ことで確認されると解釈できる。典型的なダケダ文は、〈発話者の主観的尺度に基づく前提〉を満たすものとして当該事象を限定し、それが予想を下回っていることから、「不十分」と感じられた。それに対し、「直前状態用法」は、限定される事象のみが「未実現」で、それ以外の事象は「実現」しており、当該事象そのものが「完遂に対して不足する唯一最後の事象」であることを表している。発話者がある事柄の完遂/未完遂を測るのに、時間軸に沿って実現した事象の側から測るのではなく、未実現事象の側から事象を限定し測っているとすると、「直前状態用法」も、前提集合の設定において〈発話者の主観的色付け〉がなされているということができよう。

「直前状態用法」に〈発話者の主観的尺度〉が伴うことは、(48)のような例からも窺える。「直前状態用法」は、ある事柄が事実上完遂していることを表す場合がある。(48)の場合では、「お客様が来る」ことは、「お客様を招く準備」としての具体的な事象ではなく、準備が完了した次の事象であり、実際には準備は完了していることになる。つまり、発話者がある事柄の完遂を述べる際に、完遂を支える事象を設定し直し、完遂に直接関わらない完遂直後の事象を当該事象として取り上げ、その当該事象を唯一「未実現の事象」だと表明することによって、実際には完遂していることを間接的に表明しているのである。

6. 結論

本稿は、「同義」とみなされてきた名詞句ダケ文とダケダ文に、文脈に対する適切度が異なる例が存在することを指摘し、名詞句に接続するダケと文末に位置するダケの限定のあり方が異なることを、ダケが限定する際に想定される前提集合のあり方の違いから説明した。

名詞句ダケ文とダケダ文における前提集合はそれぞれ次のようにまとめられる。

- ① 名詞句ダケ文における前提集合は、発話者の主観的尺度という色付けがなく、単に〈同列関係〉にある事象から構成される集合である。
- ② ダケダ文における前提集合は、〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の

主観的色付けがなされた集合である。

結果的にほぼ「同義」に解釈可能な例においても、名詞句ダケ文とダケダ文の限定のあり方は、①と②のような前提集合の違いがあるのである。

また、名詞述語文・形容詞述語文や慣用句用法、直前状態用法のダケダ文も、基本的には②のダケダ文と同様の限定のタイプに分類されると考えられ、分裂文の一部にも、ダケダ文の特徴である「不足感」を伴う例が存在することを指摘した。

ダケは「取り立て」に分類され論じられることが多いが、「取り立て」を考える上では、「取り立てられるものとそれ以外との関係のあり方」、つまり、〈集合のあり方〉が重要となると考えられる。しかし、集合のあり方には様々なものが考えられ、例えば、限定の意味をもつ「取り立て助詞」とされるものにも、様々なものが混在しているように思われる。同じ「限定」とされるものも、本稿で示した〈どのような集合に基づく限定か〉という基準から整理し直すことによって、広く数量表現等も含めて記述することが可能になると見える。その点を含め、本稿で扱えなかつた関連の事象については今後の課題となる。

注

- 1 ダケが名詞句に接続する場合、「名詞+助詞+ダケ」の位置に接続する場合と「名詞+ダケ+助詞」の位置に接続する場合があるが、本稿では、ダケダ文と同じスコープをとる前者の「名詞+助詞+ダケ」を、「名詞句に接続する場合」とする。「名詞+ダケ+助詞」においては、「ダケ」は数量表現に近い機能を有する。この点を含め、名詞句にダケが接続する場合のダケの位置とスコープとの関係については安部(1996)を参照されたい。
- 2 (3) a, b を「ビールを」という名詞句の限定とは考えない本稿の立場と同様の立場をとるものに、益岡(1991), 沼田・徐(1995)がある。
- 3 「慣用句用法」「直前状態用法」の分類は沼田(1992)に基づく。
- 4 厳密には、益岡(1991)では「取り立て助詞」を「は」「も」「ばかり」等の不変化詞」としているので、ダケも「取り立て助詞」に入れているかどうかは確定できない。しかし、益岡(1991)の記述は本稿の扱うダケにも有効であると考えるので、先行研究として取り上げる。
- 5 中西(1995)に、ダケシカとダケについてであるが、「暗くて輪郭ダケシカわからないけど、まるで記念碑のような大きなものもある。」(p.323 例文(36)) と「暗くて輪郭がわかるダケだけど」とした文が「ほぼ同義になる」(p.323) という指摘がある。
- 6 また、「ビールダケ飲んで、満足なんかできない」のように、名詞句ダケ文を従属節の形にし、後続文脈を主節とした文にかえると、不自然さが消え、ダケダ文と近い解釈が可能となる場合がある。これは、名詞句ダケ文が従属節の形をとることによって、後続文脈を内容とする主節に対して如何なる関係かが明示され、後続文脈の背景となる事象であることが理解されやすくなるためだと考えられる。

引用文献

- 安部 朋世 (1996) 「ダケによる〈限定〉と数量詞による〈修飾〉」『筑波日本語研究』創刊号 筑波大学芸文系・言語研究科日本語学研究室, pp.4-20
- Sano, M. (1985) LF-Movement in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 18, International Christian University, pp.245-259
- 寺村 秀夫 (1991) 「取り立て一係りと結びのムード」『日本語のシンタクスと意味』Ⅲ くろしお出版, pp.3-190
- 中西 久実子 (1995) 「シカとダケとバカリー限定のとりたて助詞ー」『日本語類義表現の文法(上) 単文編』くろしお出版, pp.317-327
- 丹羽 哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44 大阪市立大学文学部, pp.93-128
- 沼田 善子 (1986) 「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社, pp.105-225
- 沼田 善子 (1992) 『「も」「だけ」「さえ」などーとりたてー』くろしお出版
- 沼田 善子 (1993) 「「少しだけあるから…」と「少ししかないから…」」『個別言語学における文法カテゴリーの一般化に関する理論的研究』筑波大学芸文系・言語学系, pp.41-56
- 沼田 善子・徐建敏 (1995) 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, pp.175-207
- 益岡 隆志 (1991) 「取り立ての焦点」『モダリティの文法』くろしお出版, pp.173-188
- 村木 新次郎 (1980) 「日本語の機能動詞表現をめぐって」『研究報告集』2 国立国語研究所, pp.17-75
- 村木 新次郎 (1985) 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4-1, pp.15-27
- 森田 良行 (1972) 「「だけ、ばかり」の用法」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10, pp.1-27
- 山中 美恵子 (1993) 「限定と否定」『日本語教育』79, pp.76-88

(投稿受理日：1998年11月17日)

(改稿受理日：1999年5月17日)

安部 朋世 (あべ ともよ)

筑波大学大学院文芸・言語研究科（日本語学） 305-8571 茨城県つくば市天王台1-1-1
E-mail YQK02472@nifty.ne.jp

A semantic analysis of *NP-dake V* and *S-dake-da*

ABE Tomoyo

(Graduate student, University of Tsukuba)

Keywords

NP-dake V, S-dake-da, meaning of *dake* as "only" or "limited to", the position of *dake*, grouping

Abstract

In this paper, I discuss the difference between the meaning of *dake* following a noun phrase (*NP-dake V*) and when placed at the end of a sentence (*S-dake-da*). Previous studies have explained that *NP-dake V* and *S-dake-da* describe the same situation when the scope of *dake* is the same. However, the two sentences have different meanings regardless of the scope of *dake*, and the semantic difference between them is explicit in some contexts. *S-dake-da* is different from *NP-dake V* in the following two aspects,

- 1) *S-dake-da* sentences express the grounds on which the speakers are feeling or thinking.
- 2) *S-dake-da* sentences imply the speakers' feeling of insufficiency.

I assert that both *NP-dake V* and *S-dake-da* sentences single out an element from a set of elements, but the nature of the sets is different. Speakers would use *NP-dake V* sentences when there is no presupposed meaning to the set of elements as a whole. Elements in the set could be replaced by other elements perceived to be equivalent by objective criteria. On the other hand, speakers would use *S-dake-da* sentences when all elements in the set have a special meaning as a whole. Therefore, when one or more elements in the set is missing, the speaker may have a sense of insufficiency. *S-dake-da* sentences include noun-predicate sentences, cleft sentences, idiomatic sentences, and so on. These sentences also have the semantic feature that *S-dake-da* sentences have.